

ジーの類が好きな学生だと、『デルトラ・クエスト』（岩崎書店）といったものを読んだことがある者はいる。しかし、全般として翻訳ものはまず読まれません。実際の読者層は年齢が高いか、かなり読書力のある子ではないか。

つまり、「児童文学」が一番最盛期だったのは六〇〜七〇年代だった。作家も編集者も、少年少女の読者も、その時、「児童文学」が一番、あるいはかろうじて成り立っていたのではないか。でも、栄光のあのときをいま一度……というの、それはちょっと違うだろうと思いますね。

いずみ 栄光よもう一度は、ちょっと不可能ですね。

佐藤 ではどうすべきか、「児童文学」というジャンルを「一般文学」からあえて区切るのはなぜか、といった点に戻ってもう一度考える……そうしたことが必要だろうということから、あの評論を書くに至った、ということになるでしょうか。

●児童文学と一般文学との垣根

いずみ ありがとうございます。翻訳作品の話にいく前に、佐藤さんのほうから小学校の高学年辺りの作品と一般文学とを分けて考えることに意味があるのか、というお話がありました。例えば、角田光代さんなんかもそうだけども、非常に曖昧模糊としたところもあると思うんですが、ひこさんは、どういうふうにかえてらっしゃいますか。

ひこ まず、抑えておきたいのは、物語に限っていても、本しかない時代を除けば子どもにとって子どもの本が占めるシェアは少ないことです。しかも一点一点の発行部数は売れっ子を除けば、せいぜい五〇〇〇部ぐらい。

さくま ふつうの児童書の初版部数は、今はもっと少なくなってる。平均すると三〇〇〇部ぐらいかも。

ひこ だからたいした意味はないと言いたいわけではないんです。そうではなく、子どもの本は、少ない数でも、その物語を必要とするであろう、楽しむであろう読者に向けて作られてきたことを言っておきたいだけです。たくさん観客や視聴者を必要とする映画やゲームやテレビとは作り方が違います。誤解がないように強調しておきますが、どちらが良い悪いではありません。ただそうだとということ。さてそこで、二つの要素について述べておきます。

一つは、子どもの本の中の動き。七〇年代に今江祥智さんたちが子どもの本の枠を抜けようと、様々な大人向けの小説を、これも子どもの本だ、あれも子どもの本だと、今言うYA小説やそれに近い大人向けの本を取り込んでいきました。タブーの崩壊という言葉もありました。それは理論社の大長編シリーズに象徴されるように、児童文学が扱う素材やテーマ、分量を、これまでになかったものにしていくために必要な作業だったんです。上野瞭さんと始めた小冊子「U&I」や、児童文学プロパー以外をたくさ